

23. 秩父夜祭

人生で影響を受ける出会いに3つあるという。1に人物、2に書籍、3に場所。私が秩父夜祭を知ったのは秩父神社宮司の園田稔さんと秩父商工会議所会頭高橋信一郎さんという人物との出会いだった。園田さんは京都大学名誉教授の肩書があるように卓越した宗教学者であり「文化としての神道」というご著書を頂き、神道について考える端緒となり、祭の学識を深めた。高橋さんは「全国山・鉾・屋台連盟」の事務局長として国指定文化財である全国32の祭の組織を束ねる祭関係者の衆望を担うキーマンだった。従って、秩父夜祭は私にとって特別の祭となった。

私は至学館大学でコミュニケーション関係の研究所長を引き受けた時、コミュニティと祭の関係をテーマにしようと思い立った。そこでまず初年度は愛知・岐阜・三重3県の祭関係者を対象に「日本の祭シンポジウム」を開催、続いて秩父の地で2回目を開催した。

秩父夜祭は別名「霜月大祭」とも呼ばれ、旧暦の11月3日に行われていたが、現在は12月1日から6日まで行われる秩父神社の例大祭のことである。秩父神社では4月4日お田植え祭が行われるが、これは春、山の神を郷へ迎える祭であり、12月の夜祭は山に神を返す祭だ。まさに柳田国男が言う、山の神・田の神の存在、日本民族の宗教心の原型がここにある。

山の神が鎮座するのは武甲山。お椀を伏せたようなふるさとの神のいる山をカンナビ山と呼ぶ。秩父地方のカンナビ山である武甲山は蛇神の男神であり、郷である秩父神社は妙見菩薩の女神である。この男女の神が年1度の逢瀬を楽しむ祭でもあるという誠にロマンチックなストーリーも用意されている。また、秩父神社を妙見宮秩父神社と呼ぶのは明らかに神仏習合の思想であり、武甲山は秩父神社から北の方角に当たることから北辰思想も入っているという。北辰とは北斗七星を天体の

中心と考え神格化する儒教である。秩父夜祭は神道、仏教、儒教という日本人の宗教観の集大成のような祭だと感じ入った。

以上のことは祭の観光客には関係のないことである。祭の見せ場は3日午後6時ころから始まる笠鉾2基、屋台4基の引き回しであろう。屋台両袖の特設舞台で行う秩父歌舞伎、曳き踊り、神楽などは国指定無形民俗文化財ではあるが、神社からほぼ1キロ離れたお旅所への屋台の曳き回し、別けても団子坂の曳き上げの頃が見ていて一番気合が入る。どこの祭もそうだが、芸能関係の文化財より重量感のある曳山の動き、揺れや軋み、また其れを動かす祭人達の掛け声、力、熱気、興奮のダイナミズムの方が見る者には血湧き肉踊り惹きつけられるものがあり、神の憑依する非日常性の世界がここにある。また、澄み切った冬の夜空に広がる花火もこの祭の特徴だ。

京都祇園祭、飛騨高山祭とこの秩父夜祭を日本3大曳山祭あるいは美祭と呼ぶ。